

## 第11回 学びのコミュニティ研究会



平成27年1月17日(土)  
エスポワール愛媛文教会館 2階  
15:00~

挨拶 讃岐幸治

子ども自身が受け身ではなく主体的に町を作っていくことを構想していた時期がある。ダイナミックな形でどう作っていくか。今日は楽しみである。

### 子どもがつくるまちづくり

～とさっ子タウンの実践から学ぶ～

話し手：内田 洋子 聞き手：溝渕 雅子

ドイツのミニミュンヘンを参考に、子どもが運営するまち「とさっ子タウン」を2009年より開催した。この名前は実行委員の大学生が考えた。

開催は毎年8月の第3土日の2日間、11時集合で17時30分解散する。場所は高知市文化プラザかるぼーと。対象は大人の言葉が分かる年齢、小学校4年生～中学校3年生とした。理由は、1歳～9歳までは、周りの人がいつくしみ育てる、10歳からは自ら育つという成長の段階もあり、私たちは「自ら育つ子をサポートする」こととした。

主催は、高知市文化プラザかるぼーと及び、とさっ子タウン実行委員会、高知市市民活動サポートセンター、NPO 高知市民会議である。

初めに、参加した約400名の子どもたちにルール説明を行う。ガイダンスは子どもだけでなく、傍聴している親に向けても意識して行っている。まちのルールは自らの責任下において変更することができる。とさっ子タウンには市長や市議会があり、そこでルールを決めている。失敗しても成功しても責任を持つことが前提。実行委員会の大学生や大人はそれを見守っており、よほどのことがない限り、口を出さないし、今まで出したこともない。

子どもはまずは、①市民登録局で受け付けをする。受付を担当するのは、高校生や大学生。子どもが一気に来るので子どもの力に押されないでがんばっている。子どもには市民証に入国スタンプを押す。名前が「タウン」だが、使う言葉には市や国が使われるゆるやかさがここにはある。

会場はすべて段ボールでできている。とさっ子通貨18トスを支度金として渡す(1トスが50円感覚)これで、仕事に就くことが出来なくても、お菓子は買える。

次に、②ハローワークでやりたい仕事を選び、市民証に記入してもらう。働く時間は

職種ごとに決まっているが、時給与は全部同じ。

③職場に行き、仕事をする。職場ではプロの大人が仕事を教える。例えば新聞社に就職すると、名刺をつくり、取材を行い、記事を書いてとさっ子タイムスの発行を行う。アドバイスの大人は新聞社の記者、すぐに発行できるよう記事の書き方を教える。

放送局ではアナウンサーやプロのスタッフがアナウンスのやり方や原稿の書き方など、本職が来て教えてくれる。交番も本当のお巡りさん写真屋さんプロの大人である。

③仕事が終われば、銀行で給与をもらい、隣接している税務署で税金を払う。現在は給与の10%である。税金を支払わなければ、次の仕事に就けない。納税の告知も行っている。

④市議会もある。市長は選挙で決める。税金については、とさっ子タウン実行委員会で公の資金も必要であることを前提として、10%としていた。しかし、初年度市長選挙で選ばれた市長は5%にした。そのため、税収が減ったため、窓口を一部閉鎖するなどの対応をして、たいへん混雑した。その翌年当選した市長は、給与を1.5倍にすると確約して当選した。結果、物価が上がることとなった。初代の市長は、税金を下げることで、市民社会を混乱させた責任を感じ、議員となり、議会で税率を10%に引き上げる力となった。

市民の意見を出し合う「つぶやきボード」も設置しており、そこには、値上げ反対とか、まちをきれいにしたいとか、書かれてあったりする。

市長は税の収入が足りないのなら寄付してもらったらいいと提案し、寄付を募ったがこれが、けっこう集まったようだ。

⑤仕事が終わって、給与をもらって、ひと休みするバーもある。(バーテンダー協会の人の協力)また、本物の芸子さんが、この事業のために着物を着て髪を結び、白塗りできてくれて、お座敷遊びもできる。日本の作法を教えたいと、協力してくれているが、去年から浴衣の着付けも教えてくれるようになった。

高知大学生の囲碁クラブによる囲碁のコーナーやお菓子などが買えるくいしんぼう市場、スポーツ広場もある。

⑥就労経験を積み資金をためれば、大学生のサポートで事業計画を立て、新規店舗をだすことができる。個人事業主で今まで一番儲かったのは、宝くじ屋さんだった。

しかし、宝くじで儲けたお金の盗難もあって、子どもの町だからといって甘く見てはいけない。

博物館を経営したいという子どもがいたが、出資金が足りなく、共感した他の子どもと共同で事業化した。こんな共同事業も普通にやっている。課題が生まれても、子どもたちは助け合いながら解決していく。その力を信じて見守っている。

市長や議員選挙ではそれぞれが公約(マニフェスト)をつくる。投票用紙も箱も本物を高知市から借りる。おもしろいのは、大丈夫かなと思っていた子も、市長になったら態度がそれらしくなる。本当の市長と対談したり、勉強もできるようになった。

議会では、大学生が話し合われていることをその場で模造紙に書いていく。これも大学生のスキルを高めることになる。

日本銀行のブースでは、短期経済観測（日銀短観）の仕方を学ぶ。これには知事もびっくり。お店を調査して予測を組み立て、自分なりの将来予測を発表する。

保護者は町の中に入れない。ただし、教育関係者や協賛企業の方たちは 1000 円で入国でき、とさっ子観光局のガイドがまちを説明してくれる。大人だけ入れる「大人カフェ」で大学生の実行委員からとさっ子タウンの説明があり、意見交換などをする。

保護者と子どもで話し合いができるように、市民証には子どもが体験した仕事がかかれている。また、友達になった子の写真を貼るところもあり、家庭で話ができるよう工夫をしている。

課題としては、保護者の対策である。初年度、チラシに「汚してもいい服で来てください」と書いたら、電話で「汚さない工夫をしてください」と言ってきた。

数年前、しょぼんとしている子どもがいるので聞くと、お母さんが「固い職業につきなさい」と言う。そのような大人への対策として、子どもが受ける最初のガイダンスを希望する保護者も聞けるようにしており、そこで、子どもに対してどのような働きかけをしているかを聞いてもらい、このイベントの趣旨を理解してもらおうことを狙っている。しかし、ほとんどの保護者はこのイベントの趣旨を理解してもらっていると感じている。

実行委員会で活動するメンバーのほとんどは大学生。課題別小ユニットで具体的な課題に取り組んでいる。その中で大人も大学生もスキルを磨いている。

この事業の資金を確保するため、企業や団体に協賛金を依頼する「営業ユニット」、商品開発を行い運営資金の確保を行う「こうてやユニット」、全体の仕組みプログラムの企画をする「だんどりユニット」、当日の食べ物の調達をする「くいしんぼユニット」、まちのデザインやまちに必要なものを調達する「よろずユニット」の5つのユニットと、当日のボランティアの対応やユニットの調整もする学生だけで構成する「学生ユニット」があり、実行委員長含め、学生がリーダーとなっている。

新しい学生を確保するために、卒業していく子には、後輩に声掛けしてもらったり、大学の教室をかりて勧誘をしている。

実行委員長も最初は声が小さかったが、1年経つと堂々としてくる。大人はそれぞれの会議に入って行って、議事進行のサポートをする。決めるのは学生も大人も同じ立場で行う。

まちは、板の段ボールをお店の要望に応じて大学生がつくる。この事業を通して学生の体験が増え、成長がとてもよくわかる。その姿を見て、やってよかったと心から思う。

NPO 高知市民会議の事業の狙いはすべて住民自治が担える人を増やすこと。たくさんある事業の中で、とさっ子タウンは「こどもの力を信じよう」が合言葉。自らの決定に責任を取る。大人の立ち位置が難しいが、ミュンヘンでは主体性をゆだねて、困ったら相談にのるくらいのつもりですればいいといわれた。

こどもたちは、この仮想の街で何か心に残る学びがあるといいと思っている。トラブルがあっても、子ども同士で解決する方法を探る。ミニ・ミュンヘンでは正式な市民になるためには、30分ほど「けんかアカデミー」の研修を受けなくてはいけないようだ。まだまだそんな力はないが、興味のあるワークショップなので、勉強していくつもりである。

溝淵：どこでもできそうで、できない。どっかの自治体に見せてやりたい。

内田：選挙も最初は投票率が良かって、高知市長が選挙率を羨ましがっていたが、今年は40数%。投票に行くことを促すように働きかける、例えば、仕事が選挙の時間にかかるようであれば、雇い主がその時間は選挙に行くことを優先するようにした。

溝淵：小回りが利く。大人の世界ではできない。税率を上げたり下げたりすることで、考えの幅が広がる。

内田：中3までしかとさっ子タウンに参加できない。卒業すると実行委員会への入会の招待状をだすことにしている。

溝淵：企業さんも協力してくれてすごい。

内田：NPO関係で知っていた四国銀行にこのイベントへの協力依頼に行った。しかし、単なる職業体験イベントとは違い、こどもが継続して参加し、まちづくりにかかわる人を育てることを伝えると、本気に取り組む姿勢を示してくれた。

営業ユニットの大学生は、プレゼン資料をつくり、名刺の交換方法から練習して企業に説明に行く。毎年、こうして企業が賛同してくれ、60万ほど資金が集まった。

溝淵：なぜ始めたか。

内田：まちづくりファンドの実行委員長（早稲田大学教授）が、ミュンヘンで仕事をしていたときにミニミュンヘンに出会った。取材し作成したDVDをみせてくれた。これを見て、「やりたい」と思った。しかし、一人では到底できない。何人かのコンサルやプランナーの専門家に声をかけ、まちの設計図を書くことから始めた。もう一つの課題はこの規模では、私たち大人だけではだめ。知っている大学生は2人だけだったけれど、集めてもらった。そうして、実行委員会を立ち上げて、実施するまで2年かかった。

溝淵：400人の子どものうち、何割が仕事をして何割が遊ぶか。

内田：まちの設計は、6割が働いて4割が遊んだりショッピングをするようにした。もちろん、全く仕事をしない子どももいる。時給は当初1時間あたり10トス（500円ほど）にした。それを基に、「とさっ子タウン」内で流通するお金と金種を計算した。

### 質問タイム

Q：お店とか、仕事の種類はどうきめるか

A：実行委員が決める。雇い主は、実行委員か専門家。

Q：仕事の時間はどのくらい？銀行でお給料、税金はどのようにしているのか

A：仕事の時間はそれぞれの職種で違う。清掃局は30分とか、だいたい1時間単位。漫画家のアシスタントは3時間とかということがあがる。

給与は銀行に行き、市民証を見せて支払を受ける。税務署は、銀行の隣。税金を払ったかどうかは市民証に印を押すようになっている。払っていないと、次の仕事につけない。銀行や税務署で働く子もちろんおり、納税キャンペーンもしている。

Q：いつ選挙するのか

A：1日目が始まった時にする。5年生から立候補。誰でもOK。ガイダンスで立候補する子に選挙管理委員会まで来てねと言っておく。選挙があるのを知っている子は最初からそのつもりで参加してくる。

Q：お金は毎年どうするのか。

A:銀行に預金もできる。参加年齢が過ぎる子もいるが、そのお金は兄弟に渡したり、友達に渡したりしているようだ。今後贈与税や相続税を設けるかは課題である。前年度来た子は裕福なので、スタートラインで貧富の差がある。

Q：参加する子どもは毎年来るのか。

A：毎年、半分の子どもがリピーター。リピート率は50%ぐらい。IDをもっているの、1年来なくても大丈夫。バーコードで入国したか帰ったかが分かるようにした。終了した後でこどもが残っていたら大変である。

お迎えに親が遅れてくることもあるし、子どもが勝手に帰ってしまうこともある。子どもを必ず親に渡すことにしている。

親から、意見や感想をもらうようにしている。例えば、「最初に行くのをやめようかな」とぐずっていた子が、1日目が終わるなり、明日も行きたいという。

お店を開きたい子は、起業する。起業するには、供託金がある。供託金は20トスぐらい。儲ける子もいるが、赤字になる子もいる。会社を興すより雇われた方がいいと悟る子もいた。

Q：融資は？

A：ひよっとしたらでてくるかもしれない。本物の社会に近づく。

Q：仕事と物を買うのをどう両立するのか。

A：仕事をするのは、30分か1時間、短い時間で仕事したり遊んだりすることができる。仕事をいっぱいしてお金を稼ぐ子もいる。また、子どもなりにこの2日間の予定を決めてくる子もいる。1日目は仕事して、2日目は遊ぼうと考えていたりいろいろである。

また、稼いだトスで家族の人数分だけお菓子一杯の大きな荷物をかかえて帰る子、花屋さんに、おばあちゃんとかお母さんに買う子それぞれである。

Q：参加料は

A：2日間で1000円。

Q：実施に必要な費用は？

A：最初は、イスや継続して必要なものを購入するため、民間の補助金300万円をもらった。現在は、100万くらいでできるようにしている。企業協賛や、現物協賛など

の他、飲食店で寄付付きメニューを設定してもらい、その寄付をいただいている。

Q：後日保護者にアンケートなど取るのか。

A：FAXやメールで子どもとのやり取りをいただけるようお願いしており、たくさんさんの楽しい感想をもらっている。また、子どもたちには10トス（500円見当）を残してもらおうようにしており、それをもって高知市内の商店街で使えるよう商店街のお店に協力してもらっている。その時には家族で買い物ができるので、商店街の収益にも貢献している。同時に写真展も行い、購入することができるし、その時にスタッフと交流ができる。

### グループ討議

ア：NPOはどのような活動をしてきたのか、どさっ子タウンのウエイトはどのくらい占めるのか。

内田：1999年、市民活動を支援する目的で設立。職員は5名。人材育成やスキルアップなど、たくさんさんの事業の一つで、この事業だけしているわけではない。

市民活動をしている人たちが会議室や印刷などの利用をしているが、若い人が来なかった。この事業では学生のウエイトが大きいこともあり、彼らが他の事業にも参加してもらえるようになった。

イ：事業のねらいは。

内田：住民自治を担える人づくり。表にはでないが、理事やスタッフは理解している。

ウ：議会はどのような形で運営されるのか。

内田：市長と副市長2名。議員5名で構成。サポートするのは大学生。立候補する子は自分の思いや「つぶやきボード」の書き込みなどを参考に立候補し、公約をつくる。

議会は、1日目の14時ころ市長や議員選のあと、16時頃開催。そこでの決定事項はとさっ子広場で発表され、2日目と次の年の1日目に反映される。

エ：こどもの自由自治というが、市長は問題を考える時間や仕組みを短い時間で理解できるのか。

内田：立候補は5年生からで、ガイダンスでわかるように説明をする。体験しながら解るといふ子もいると思う。起業についてはコンプライアンスも含めて、サポートセンターで相談にのる。

オ：大学生の確保は

内田：活動をしている大学生に声をかけて、大学内でプレゼンをしてもらっている。

カ：成功の秘訣は

内田：柱が立つまでは、子どもの力を信じる人、子どもの健全育成などが理解してもらえる人、楽しい活動をしている人など、大人を選んで協力をお願いした。継続していくうちに、大学生に一番成果が見られるようになり、就職にも役立っている。

副産物としては、県や市の教育委員会と仲良くなれたことであり、市の議会などでも各会派で受け入れられているようだ。